

2013年
12月20日
金曜日

クリスマスが近づいています。北米、欧州及び中近東が冷たい雪に見舞われています。

シリアから国外に脱出した200万人を超える難民が、雪の難民キャンプで生活を強いられています。EUは、新たに1万2千人の難民受入れを決め、総額2000億円近い資金を投じて難民キャンプを支援しています。なお、世界の難民受入れの70%以上は欧州が受入れています。

日本と韓国それに中国も、アジアで難民条約を批准している数少ない国ですが、多くの難民受入れを行う余裕はありません。ただし、日本は近年、第三国定住難民受入れを開始し、難民認定を受けられなかった人にも許可を与え、年間1500人前後を受入れています。

高い経済成長を続ける中国は、国内問題が深刻です。経済格差や環境

井口 泰 教授（労働経済学）

不安定化する世界で生きる勇気

（ヨハネの黙示録3・1～6）

破壊が拡大し、物価が上昇し、地方政府で汚職や賄賂が蔓延しています。

同時に、金儲けと拝金主義への嫌悪感も広がっています。家庭教会の形でキリスト教が広がり、13億人のうち1億人を超えたとみられます。

グローバル化のなかで、人々が拝金主義と自己中心主義にかりたてられる一方、これに対する反省も広がり、国際協力の必要性が認識されつつあると思います。

経済学部で「経済学トピックスJ―経済と倫理―」という授業を開始して、5年目になりました。それは、アメリカの投資銀行によるサブプライム証券が債務不履行に陥り、世界経済危機の発生した翌年でした。その目的は、不安定化した社会で、自らが行動し、問題を克服する「勇気」を持っていたいただきたいからです。「勇気」とは、如何なる不安や危機にも「かわ

らず」、自分を肯定して生きる力です。

1517年は、欧州で、マルティン・ルターが、宗教改革を起こした年です。ドイツのプロテスタント教会では、4年後に宗教改革500周年を迎える準備を進めています。

実に、「勇気」こそ、プロテスタンティズム精神の神髄であったことを、今日は、強調したいのです。ルターは、自分の存在を否定するカソリック教会の権威によって、死の危険にさらされ、罪に定められていました。プロテスタントは、そうした危機の時代に生きる精神であったのです。

中世には欧州最大の都市であったドイツ・ニュルンベルク出身の画家アルブレヒト・デューラーが書いた「騎士と死と悪魔」には、当時のプロテスタントの精神が描かれています。不安や死などにとりつかれずに、真つ直ぐ前を向いて進む勇気です。

ヨハネの黙示録の第3章第1節から第6節には、「あなたが生きていくというのには名ばかりで、実は死んでいる。目をさませ。死にかけている残りの者たちを強めよ。……もし、目をさましていないならば、私は盗人のようにいくであろう」と記されています。

必要なことは、第1に、自らが不安定な世界に足をとられないだけではなく、世界が抱える問題を克服するため、小さくても、勇気をもって行動することです。第2に、不安定化した世界の犠牲になる人々がでないよう、常に目を開いていることです。皆さんには、不安定化した世界で、世界のために働く情熱と心構えが必要です。関学が目指す「世界市民」ということばを、自ら実践する意思があるなら、皆さんに必要なもの、それが「生きる勇気」です。■